



若き日の山行→槍ヶ岳

おおうちクリニック
大浦 孝

1965年、(昭和40年4月)金沢大学へ入学した。金沢は春爛漫、町中桜吹雪の中、兼六園の夜桜見物に先輩と出かけた。兼六園は花盛りで大賑わいであった。擦れ違う見物客の表情まで晴れやかに見えた。

その頃、その先輩と相部屋で寮生活を送っていた。そこは西の廊(くるわ)に近く、ある大先輩は廊から登校していたという伝説もあった。寮は古い木造建築が鉄筋コンクリートに新築され、畳の大部屋は二人相部屋の洋間のアパートに変わっていた。それでも24時間騒々しく忍耐が必要であった。また非常に野放図で、部屋の掃除などしたことがなく万年床であった。コーヒーカップが灰皿となり、必要なとき簡単にすすいで、またコーヒーカップに使ったりしていた。その当時は合理的で不自然な感じもなく、ごく普通の生活と思っていた。寮の食費は、朝10円、夕80円、計90円でまかなわれていた。全くの粗食で、朝のみそ汁など、ひどい時はもやしや2、3本浮いているだけであった。その頃学食では素うどんが40円、定食のゴールデンランチが150円であった。いまでも手元にある角川国語辞典の定価は450円となっている。

ところでその先輩は山岳部に属し山男であった。部屋には恭(うやうや)しくリュックとピッケルが飾ってあった。先輩は医学部に入ったのではなく山岳部に入ったのだと嘯(うそぶ)いていた。実際に、シーズンになると1カ月程部屋を留守にしていた。いわゆる山小屋生活、山籠りである。髭面の山男曰く、「山を降りて町に出ると女性が美しく見える。」と。先輩方は新人の歓迎勧誘の意味もあり、立山を初めとして北アルプスの山行の話聞かせてくれた。リーダー曰く、「槍は弧峰の如く、穂高の後ろにそびえている。」

その後その話を聞きつけ我々素人3人で無謀にもリュックを担いでテントで一泊し、槍ヶ岳の頂上を目差す計画を立てた。日程はリーダー

の企画によりすでに決まっていた。時期は秋休み。金沢から北陸本線で親不知、子不知を経て糸魚川まで出た。大糸線に乗り換え、信濃大町を経て松本へ到った。その先は松本電鉄の島々線へ乗り換え、乗鞍岳を左手に眺め上高地に到着した。

あの有名な上高地の河童橋の架かる梓川と大正池を横目に、登山道へ入った。すでに先に出発している他のパーティーの後を追うことになった。一日目は暮れて大雪渓(槍沢)でテントを張り、無事一泊できた。

翌朝、銀世界で銀色の道を槍へ向かった。ところがサングラス無防備のため、雪眼にやられていた。涙ポロポロで、稜線を登り続けた。大曲(おおまがり)を過ぎ、殺生(せっしょう)あたりか、視界は霞、足を踏み外し尾根より50m程下へ転落した。幸いなことにスロープの途中の大木の根元にひっかかり命拾いをした。そのまま雪崩していたら千仞(せんじん)の谷底、行方不明の身となっていたことだろう。これにひるまず置いてきぼりにはなるまいと、果敢にもそこから這いずり出し、再び元の稜線へ辿り着いた。何事もなかったかの如く、メンバーの後を追いかけてもくもくと頂上を目差した。

遂に、頂上に達し、例の鉄製の梯子(はしご)を一段一段慎重によじ登った。梯子を登り終え、大槍の穂先(約20畳)に立った。すでに先のパーティーは穂先に達しており、眺望に歓喜していた。私には山を征服した勇者の様に見えた。頂上からの眺望は正に絶景であった。360度のパノラマ、雲海の中に北アルプスの山々が神々しく突き出していた。時には富士の霊峰も遠望できるという。

若気の至りで最初で最後の処女体験となった。今まで誰にも話す機会が無く、遠い記憶の彼方に沈殿していたのが触発されて記録に留めることになった。生命を五感で感じる至福の時とは言えず、逆に山で命を落とす寸前の寸劇を御紹介した次第である。

沖縄に帰郷してからは「仁者は海を愛する」の生活となった。

「山は地図で見ても分らない。本で読んでも分らない。写真でながめたものとも違う。自らの足で登り、自らの眼で確かめる以外に山を理解することはできないのだ。」

(新田 次郎 孤高の人 新潮文庫 1973年)